鴻業集

木藤才蔵編

古典文庫

鴻業樂

木藤才藏編

古典文庫

古典文庫第四三二冊

昭和五十七年九月二十五日印刷発行　非売品

集
葉
随

編者　木藤才蔵
発行者　吉田幸一
印刷者　共立印刷株式会社

発行所　114 東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話（九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

不許覆刻

目次

凡例……三
随葉集大全
初心之心得……七
句数之事……八
巻一　春部……一五
巻二　夏部……五四
巻三　秋部……七九
巻四　冬部……一一三
巻五　恋之部……一三四
巻六　名所部……一五五

巻七　神祇・旅之部……二四八
巻八　述懐・釈教之部……二六三
巻九　草木・動物等……二七九
巻十　雑部……三〇三
古活字本随葉集との校異表……三四一
解　説……三六一
寄合見出語索引……三八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

凡　例

一、本書の底本には、寛文十年刊『増補随葉集大全』を用いた。『増補随集大全』は、古活字本『随葉集』系統の本文に、増補改訂を加えたものである。

二、本書においては、底本と古活字本随葉集とを対校し、増訂された部分を明らかにするために、次のような措置をした。

(1)『増補随葉集大全』にあって、古活字本に存しない本文には、「　」を付した。「増補」随葉集「大全巻之一」目録

(2)『増補随葉集大全』と古活字本とで、本文の上に異同のある場合は、その箇所に、※印と注番号を付し、両者の異同を巻末に表として掲げた。

三、底本の翻刻にあたっては、次のような方針をとった。

(1)　底本の異体字は、通行の字体に改めた。

(2)　和歌以外の本文には、適宜句読点・濁点を付した。

(3) 割注の部分は、前後に＜　＞を付して一行にした。雪けの水雪さえし水と云心也
→雪けの水＜雪さえし水と云心也＞

(4) 底本では、右脇に付してある振りがなを版に組む関係上左脇に移した場合がある。一三句去聳物ソヒキモノ → 一三句去聳物ソヒキモノ

(5) 底本には、目録および本文中の見出語に、巻ごとに漢数字で番号が付してあるが、翻刻にあたっては、これを省略して、本文中の見出語に巻一から巻十まで、通し番号を算用数字で付した。

四、巻末の索引には、寄合の見出語（子日には、色このむには、など）だけを取り上げた。

五、随葉集大全の翻刻にあたっては、佐野典子さんの助力を得た。厚く謝意を表したいと思う。

昭和五十六年十月三十日

木藤才蔵

増補 随葉集大全

寛文十年刊

「増補随葉集大全附録

初心之心得

一発句は、哉　や　そ　なれや　いつ　いづく　たり　めり　たれなど、其外、花さけ・月すめなどの下知したる詞、所詮大体の切字を用らるべし。けりどまり・大まはし・三段切・はね字どめの発句など、たとひ口伝を受たりとも、初心の輩・若年の人は、用捨あるべき事也。

一脇の事、これは、宿・空・雪・庭等のしかとしたる字を以てとめらるべし。たとひ、二字・三字にても、山時鳥・朝霞など共留らるべし。なる・めり・たれなどはとめず。涼しさ・長閑さなど、名人の留たる有といへども、一向其まねなさるべからず。

一第三の事、まづはてどめ、又はらんどめにもせらるべし。にどめ・もなし・はなしなど指出過たるは用捨しかるべし。

一四句めは、四句めぶりといひて、けり・たり・なれなど、かるきてにはにてとむる也。脇の句に似ぬやうにするといふ、口伝の説なれども、こゝにしるす也。五句めは少たけ高くする物也。

一下の句のにどめ・てどめ・見ゆどめなど口伝有。たとひ、口伝を受らるゝ共、初心の間は用捨する事なりとぞ。

一つゝどめ、上の句には昔は有といへ共、今は一向なし。歌の上の句のやうになる故也。下の句には、少心持有てとむる事なれば、習をうけて後せらるべし。

一にてとは、上に、を・は・もからぬ・にはなどいふおさへ字を置て留給ふべし。此外に、心にておさへて留る事も待れども、それは功者のわざ也。

句数之事　并去嫌

七句去

一春秋の句〈二句にては不レ捨。三句より五句に至る也。とは、四句にてもくるしからずといふ事也。かゝる時、たとへば、春の句五句つまりたる六句めにならば、野

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

に出てあそぶ心、または郭公をまつなど、心は春にして詞は雑、または、他の季のことばをとり出て、六句めをはなるる事大切也。また、秋の句五句つまりて、六句めには野山もさびしきけしき、または風の寒きていなど、冬の句ながら、秋の末にも心通ずる事、何にても付らるべし、夏冬も同断。〉

一七句去夏冬の句　〈二句より三句まで、平句にては一句にてもすつる也。発句、なつふゆの句には、脇は是非に同季。〉

一五句去神祇之句　〈一句にてもくるしからず。三句よりおほくはせず。〉

同一釈教の句　同前。

同一述懐無常の句　〈一句にても不レ苦。引合ては三句もする也。無常ばかりも三句はつゞかず。述懐ばかりも三句はつゞかず。懐旧といふ事、述懐と同じ。別にして用る也。又述懐・無常・述懐、無常・述懐・無常とはさみてはあしゝ。〉

同一恋の句〈二句より五句まで、一句にては不レ捨。恋の字は折を嫌也。〉

同一居所〈一句にても不レ苦。三句までつゞく。其中にも、体用吟味あるべし。体々用、用々体などはよし。体用体、用体用とはさみてはあしゝ。また、住居や家の風な

ど、よはき物は二句去也。宮寺・皇居は居所をのがるゝ也。〉

同山類　同前。

同水辺　同前。

三句去

一人倫〈二句もつゞく。一句にても不レ苦。帝王の君は非二人倫一　恋の君は人倫也。

公侯伯子男も人倫也。〉

五句去

一旅之句〈三句より多はつゞかず。一句にても不レ苦。旅の字は一座に二句、折を嫌也。〉

同

一生類〈かはりたる物も二句より多はつゞかず。鳥と虫、虫と魚、魚と獣。〉

但三句去モアリ

一同〈鳥と虫と、虫と魚、魚と獣など、かやうにかはれば三句去也。〉

打越嫌

一猟網〈など生類の其名なきも生類にあづかる事は、皆生類にうちこし嫌也。付ては句により不レ苦。〉

五句去

一植物〈かはりたるも、二句より多はつゞかず。木と木、草と草。〉

但五句去モアリ

一同〈木と草、草と木、かやうにかはり、又、竹と木とも草とも三句去也。木の字、

草の字は字去也。〉

五句去
一衣類〈二句より多はつゞかず。衣と云字は七句去也。衣川などいふと、衣類の衣とは五句去也。〉

三句去
一名所〈名所と名所は三句去也。名所と国の名とは二句去也。但、伊勢のうみ、あふみのうみなどいへば、くにのうみといふ名目にて名所に三句去也。国の名と国の名とは三句去也。名所も国の名も二句はつゞく也。三句はつゞかず。一句にても不レ苦。但、浦の名所と〳〵は、名所は三句去なれども、水辺五句去なる故、五句去也。山の名所も、山類にひかれて五句去也。〉

五句去
一夜分〈三句までもする也。一句にてもくるしからず。夜あけも夜分也。夜の明てとしても夜分也。明はなれとすれば、朝時分也。けふの月、けふのこよひ、非夜分。大かた、けふといふ字そへば夜分にあらず。〉

五句去
一時分〈夕時分、朝時分の事也。朝時分と夕時分とは打こし嫌也。夜分とは不嫌。〉

三句去
一降物〈二句より多はつゞかず。雪・雨・露などかはりたる事也。同じふり物は、物

三句去　により折を嫌ひ面を嫌也。一座の数も不同有。〉

一聳物〈煙・霞・霧・雲などのかはりたる間の事也。霧はふりものにも嫌也。〉

一器物〈おなじやうなり。器は三句はつゞかず。此さりきらひやう、品々むつかしき事なれば、其座の宗匠にとはるべし。〉

一名所国　神祇　釈教　恋　無常　述懐　々旧　面にはせず

一衣季や竹田の舟路　夢　波　月　松　枕七句去なり。

衣と衣七句去、竹と竹七句去也。但、竹田の里などいへる、植物の心なき竹と、植物の竹とは五句去なり。月も天象の月と月次の月とは五句去也。松も植物の松と、松の尾などゝいふ松の字とは五句去也。又、名所にも、末の松山などいふ植物の松の字より付たる名所は、うへものゝ松の字のやうに七句去也。万事此意得也。

一五句去は神祇　釈教　恋　無常　衣類　夜分に旅ぞ述懐

一植物は五句去なれど草と木と竹にかはれば三句去也
一生類は五句去なれど虫と鳥獣や魚の中は三句よ
一猟や網釣の糸など生類にあづかる故に嫌ふ打越
一居所は皆五句去なれど住居など噂にいへば嫌ふ打越
一三句去物は降物　聳物　名所　草木の中としるべし
此歌、余の事にはまぎれもなく聞侍れども、やゝもすれば初心の御衆、降物と聳物共三句嫌ふかと思ひあやまり、又はうたがひ有。それは霧、ふり物にも聳物にも、両方に嫌故を以也。降物とそびき物嫌はゞ、烟と雪も三句去べきか。
一字去とは五句去なれど書替のあれる文字は二句去としれ
思に想像　見るに記念　立に佇　余准て可知
一祝言や祈禱めきたる連歌には禁忌不吉の詞せぬ也
一大かたは夢想の会は祈禱なれば禁忌をもせず夢と云字も

一花の句に定座(デヤウザ)はあれど独吟(ドクギン)は前句によりて見はからひせよ

以　上」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton